

がんばることの大切さ

川原 瑞丸

運動が苦手なぼくは、小学校に入ると、運動会がとてもしやだった。だから、運動会の練習のある日は暗い気分になった。その上、一年生の時の運動会は負けた。運動会が終わって帰ろうとすると、上級生が泣いているのを見た。不思議に思った。運動会で負けたくらいで、どうしても涙を流すのだらうと思った。

やがて、学年が上がり、一年生の時のように遊んでいても誰かがやってくれるというわけにはいかなかった。上級生と一緒に、応援団の練習や

当日の準備をするようになった。



六年生になると、とうとう応援団長になることになった。僕は、自信がなくとても不安だった。でも、練習がだんだん進むとがんばろうという気持ちも強くなっていった。

そんな中、いろいろな苦労があった。応援団で使うボンボンを作るようになった。でも、みんなは早く帰りたいといい加減にボンボンを作っていた。仕方がないので解散して、やる気のある人で作った。

応援合戦の踊りをみんなに教えることも大変だった。一年生から五年生のみんなができるようにしなければならぬ。これも苦労した。

そして本番。僕の白組は負けてしまった。でも、すがすがしい気分がした。自分があるだけがんばったことを思うと、負けたことなどどうでもよかった。この時、初めて涙を流した上級生の気持ちがあった。本気でがんばることって大切なんだと。